

浜のくらしと祭り（第2報）

——三河湾をめぐる海村地域の祭り7例より——

古川智恵子・小川由香

Life on the Seaside and the Festivals (II)

Based on “Seven Cases Concerned with Festivals
in the Seaside Areas Around the MIKAWA Bay”

Chieko FURUKAWA and Yuka OGAWA

緒 言

本研究に先立ち、三河湾をめぐる海村地域における仕事着について、一連の調査を行ってきた。その調査結果より、浜における仕事着の形態・機能は、生業である漁業と密接な関わりをもち、日常生活に裏付けされるものであることがわかった。その言わば褻の生活の中には、晴の日としての祭りが存在し、祭りは生活の中での民間信仰と深く関わっている。本研究では、この祭りの衣裳に焦点を絞り、三河湾をめぐる海村地域の7例の祭りをとりあげ、その衣裳と海村での生活、民間信仰との関わりについて考察することを目的とする。

方 法

昭和62年6月より翌年2月まで、図1に示したように、三河湾の祭り7例——渥美町亀山の繰糸祭、伊良湖港のお糸船、日間賀島の龍宮まつり、豊浜の鯛まつり、一色町の大提灯まつり、師崎の左義長まつり、幡豆町三河鳥羽の火まつりについて聞き取り等の現地調査を行った。これらの現地調査から得られた資料をもとに、祭りの衣裳と浜でのくらしについて述べる。

結果および考察

1. 海村地域の祭り7例の由来・歴史・内容

7例の祭りの由来・歴史・内容について、表1のようにまとめた。実際に調査した7例の祭りを季節で考えてみると、初夏の祭り、夏祭り、冬の祭りの三つに分けることができる。ここでは行われる季節ごとに、各祭りのもつ意味について概略を述べる。

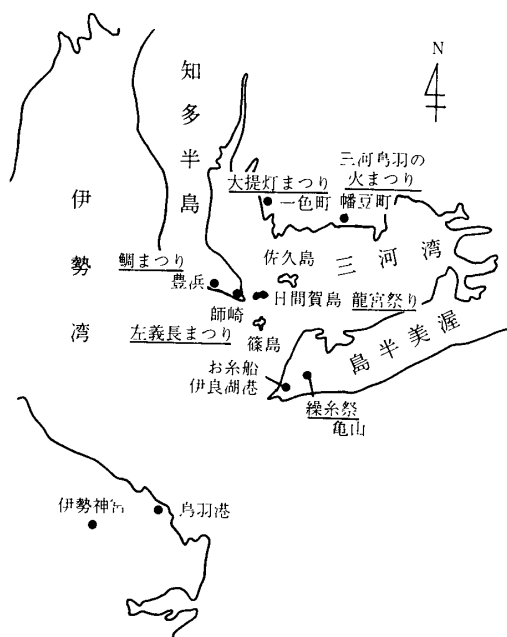


図1 調査地点

表1 三河湾をめぐる海村地域の祭り

月 日	祭 名	場 所	祭 神	由 来 ・ 歴 史	内 容
昭和62年 6月22日	繰 糸 祭	渥美郡亀山 御 糸 宮	天照皇大神 豊受皇大神	・伊勢神宮へ奉献する赤引糸を繭より採 る神事 ・7世紀より始まり、徳川期に途絶える ・明治34年、渡辺熊十によって復興され、 現在に至る。	・御料所長、神職、糸姫他二十数名による ・午前、御料所にて赤引糸を神前に供え る儀式が行われる ・午後、糸姫により、繭より絹糸が繰ら れる ・祭終了後、直会
7月3日 ～ 4日	お 糸 船	渥美町 伊 良 湖 港		・繰糸祭と一連の祭りて、赤引糸を伊勢 神宮に奉献する儀式	・御料所長、神職、糸姫他、百数十名に よる ・神宮奉献のため、お糸船に乗り鳥羽港 へ向かう ・翌日、神宮司庁にてお糸奉献の儀式
7月11日	龍 宮 まつり (ほうろく流し)	南知多町日間賀島 八 幡 社	牛頭天王 (建速須佐 之男命)	・大綿津見命(海神)に御神火を捧げる ことによって、大漁・船の安全を祈願 ・祇園信仰を基にした尾張の津島祭りに 由来し、約200年前から伝わる	・青年団による八幡社への勇み込み、祈 禱、神楽 ・午後8時頃より365枚の点火されたほ うろくを沖へ流す
7月25日 ～ 26日	鯛 まつり	南知多町豊浜 須佐区津島神社 中洲区中洲神社	須佐之男命 猿田彦命・ 国常立尊	・大漁・無病息災祈願 ・明治18年、森左衛が「はつかねすみ」 をつくる ・大正末期に「鰯海老」、昭和初期に「大 鯛」となる	・須佐区——四尾の大鯛の練りまわり、 勇み込み。神楽、太鼓打ち ・中洲区——大鯛の村内練り歩きの後、 海中を遊泳。神楽、太鼓打 ち
8月26日 ～ 27日	大提灯まつり	一色町 諏 訪 神 社	建御名方命	・約300年前、夏から秋に毎夜海魔が現 れ、田畑を荒らしたので、村民が大がが り火をたき、祈禱を行ったのが始まり ・その後、かがり火が大提灯に代わる	・青年団による太鼓打ち、神楽 ・午後7時頃より神火が大ろうそくに移 され、境内は多くの人出となる
昭和63年 2月13日 ～ 14日	左義長まつり	南知多町師崎海岸 羽 豆 神 社		・大漁祈願・集落安全祈願の火祭りて、 室町時代より「とんと焼き」等の名称 で知られる ・残り火を持ち帰ると厄よけになると言 われる	・判じ絵を描いた大轆を立て、裸男か焼 く ・また、門松等を集めて作った船を海に 流す
2月14日	三河鳥羽の 火まつり	幡豆町 神 明 社		・「すすみ」の燃え具合によって農業の豊 凶を占う祭り ・約1200年前から始まったと言われる	・午後7時頃、「すすみ」に点火し、若者 が中から神木を取り出す速さを競う

(1) 初夏の祭り

まず初夏の祭りとしてあげた繰糸祭は、伊勢神宮へ奉献する赤引糸(絹糸)を繭から採る神事である。7世紀頃より始まり、徳川期には途絶えたが、明治34年、渡辺熊十によって復興され、現在に至っている。また、7月に行われるお糸船では、その赤引糸を伊勢神宮に奉献する儀式が行われる。

(2) 夏祭り

次に夏祭りについて、龍宮まつり(ほうろく流し)は、大綿津見命

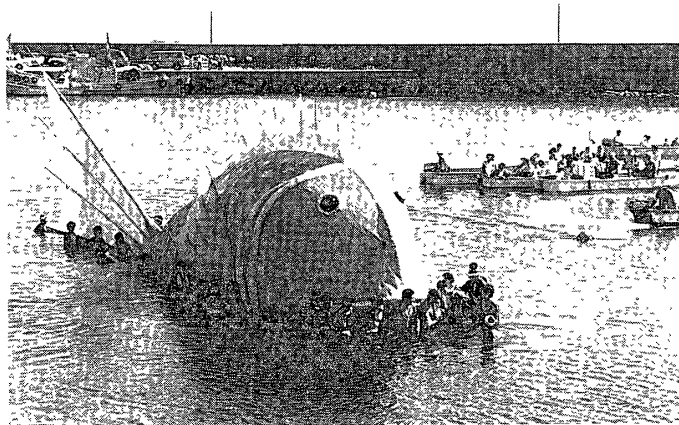


図2 鯛まつり(南知多町豊浜)

(海神)に御神火を捧げることによって、大漁・船の安全を祈願する祭りである。この祭りは、

祇園信仰をもとにした尾張の津島祭りに由来し、約200年前から伝わると言われている。また鯛まつり(図2)は、明治18年に森左衛が「はつかねずみ」をつくることで始まった比較的新しい祭りであるが、大漁・無病息災祈願の意味をもっている。大提灯まつりは、約300年前、夏から秋にかけて毎夜現れた海魔を、かがり火によって退治したのが始まりで、このかがり火がのちに大提灯に代わったものと言われている。

(3) 冬の祭り

冬の祭りである左義長まつり(図3)は、大漁・集落安全祈願の火祭りで、室町時代より「どんと焼き」等の名称で知られ、その残り火を持ち帰ると厄よけになると言われている。また三河鳥羽の火まつりは、稲わらで作った「すずみ」の燃え具合によって農作物の豊凶を占う祭りである。この祭りの歴史は古く、約1200年ほど前から始まったと言われている。

2. 「祭り」の語義と浜のくらし

以上、各祭りのもつ意味について述べたところで、「祭り」の語自身もつ意味について考えてみたい。(表2参照)「祭」は、「肉+又(手)+示(祭壇)」の会意文字であり、「肉の汚れを清めて供える」という意味をあらわしている。この文字は、「手でよごれをこすり取る」という意味の「擦」や、「よごれをよくとって見る」という意味の「察」と同系である。また、「まつり」の語は、「まつる」という動詞の連用形を名詞化したものであり、本来、「お供えする」、「さしあげる」の意味をもっている。その後、「まつり」の語が同時に祭祀行為、作法を意味するようになると、「お供えする」、「さしあげる」を意味することばとして、「たてまつる」が用いられた。「まつる」は「まつ」を語根としており、「神の出現を待つ」、「神意を占う」という意味がある。したがって、祭りとは本来、御酒・御食を献供し、神の出現を待って神意の啓示を得たり、神に感謝・祈願するための儀式であると言える。この「まつり」の語を広辞苑等で調べると、表2の中の項目2、まつり(祭)の①から⑦に示したように、7つの意味に分けることができる。この結果より、大まかではあるが、祭り本来の意味から現代における記念・祝賀等の集团的行事までをさす

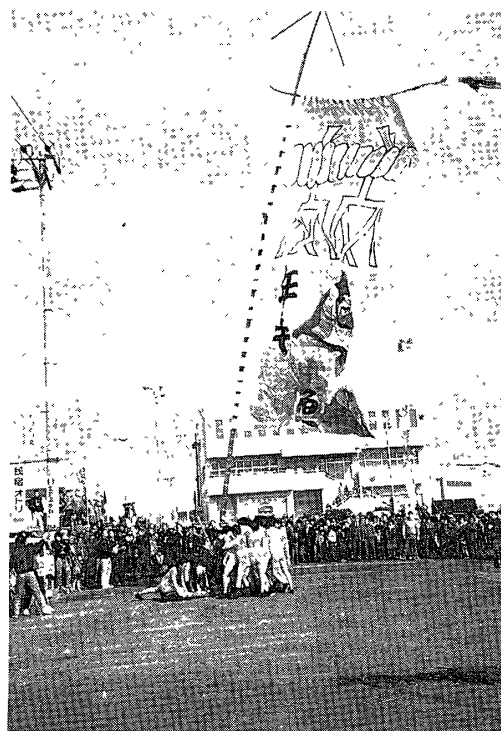


図3 左義長まつり(南知多町豊浜)

表2 「祭り」の語義について

- 1 「祭」サイ、セイ、まつる(祭る)、まつり(祭り)
 - ・「肉+又(手)+示(祭壇)」の会意文字
 - ・肉の汚れを清めて供えること
 - ・「擦」、「察」と同系
- 2 「まつり」
 - ・「まつる(動詞)」の連用形を名詞化
 - 本来、「お供えする」「さしあげる」の意——「たてまつる」の発生
 - 「まつ」——「待つ」「兆」の意
 - ・まつり(祭)——①神仏をまつること。神仏・祖霊に感謝・祈願する儀式
 - ②神仏をまつる際に神仏にささげるもの
 - ③京都、賀茂神社の祭り
 - ④近世江戸の二大祭(日吉山王神社祭、神田明神祭)
 - ⑤江戸で喧嘩を言う
 - ⑥男女の情交
 - ⑦記念・祝賀・宣伝などのために行う集团的行事

「広辞苑」第三版：新村出編，岩波書店，昭和58年12月6日
 「広辞林」第五版：三省堂編集所，三省堂，昭和54年11月1日
 「日本国語大辞典」第9巻：日本大辞典刊行会編，小学館，昭和56年4月25日

表3 三河湾をめぐる海村地域の祭り衣裳

祭名	着装者 (役割)	衣			装		その他の装身具	
		服	種	文様・染色	色・形(PCCS)	素材		構成
鯛まつり	大鼓打ち 参加者	上 紋付羽織	無地	無地(家紋)	黒 (N1 0/10 5)	麻	単衣	その他 脚絆 紺 (3PB 1 8/2) 地下足袋
		上 白 衣		白 (N9 5)	木綿	単衣		
	下 切 袴	法 被		「祭」文字紋 皮 紋 ら 紋	紺 (3PB 1 8/2) 赤 (4R 5 5/13 5) 白 (N9 5)	木綿	単衣	
	下 千 早	下 腹 巻		無 地	白 (N9 5)	木綿	単衣	
お 船	神 職	上 羽 衣	無 地	無 地	白 (N9 5) 又は 紺 (3PB 1 8/2)	木綿	単衣	(その他、現代風法被)
		上 白 衣		白 (N9 5)	木綿	単衣		
		上 裾 着 袴		無 地	紫 (6P 2 5/10 5)	絹	単衣	
		上 千 早		無 地	紺 (5BG 4 5/9 5)	化繊	単衣	
龍 宮 祭 (はつらく 成し)	水 女	上 四つ身長着	小紋型染め 鶴 紋 花 紋	薄紫 (6P 8 0/3 5) 紺 (4YR 6 3/11) 紫 (6P 6 5/7 5) 青 (5BG 6 0/8 5) 白 (N9 5)	化繊	単衣	胸元 笏 白 腰紐 薄紫 (6P 8 0/3 5) 黄 (5Y 8 0/13 5) 赤 (4R 4 3/12)	
		上 袴		無 地	赤 (4R 4 3/12)	化繊		単衣
		上 白 衣		白 (N9 5)	木綿	単衣		
		上 裾着袴		無 地	紺 (3PB 1 8/2)	化繊		単衣
龍 宮 祭 (お雛 祝日 有明、はく ろく成し)	青年団員	上 法 被	「あうしをふ」 「ふ」 市 紋 菱 型 紋	青 (5B 4 0/10) 白 (N9 5) 赤 (6PB 1 0/8) 紺 (3PB 1 8/2)	木綿	単衣	白足袋	
		上 合 衣		白 (N9 5) 紺 (6PB 1 0/8)	木綿	単衣		
		下 腹 巻 (黒水バソノ)		無 地	白 (N9 5)	木綿		単衣
		上 白 衣		白 (N9 5)	木綿	単衣		
鯛まつり	神 職	上 白 袴	無 地	無 地	白 (N9 5)	木綿	単衣	身体描心 白足袋
		上 千 早		無 地	白 (N9 5)	木綿	単衣	
		上 白 衣		白 (N9 5)	木綿	単衣		
		上 袴		無 地	赤 (4R 5 5/13 5)	化繊	単衣	
大鼓打ち・少年	青年団員	上 四つ身長着	花(牡丹) 菊 市 紋 菱 型 紋	赤(4R 4 5/14 12) 薄紫 (6P 6 5/7 5) 黄 (2Y 7 5/11 5) 白 (N9 5) 黄緑 (4G 5 0/4 5) 緑 (5BG 4 5/9 5)	絹 帯 白(N9 5) 赤(4R 4 5/14) 黄(5Y 8/13 5) 菱草取	単衣	頭巾 脚絆 わらし	
		上 裾 着 袴		無 地	白 (N9 5)	木綿		単衣
		上 白 衣		白 (N9 5)	木綿	単衣		
		上 袴		無 地	赤 (4R 5 5/13 5)	化繊		単衣

ことがわかり、時代による意味の推移の過程をうかがうことができる。まつりの語は、もともとは神仏・祖霊に感謝・祈願するという意味をもつが、さまざまな意味を含みながら時代とともに変化し、現代における祭りとは、まつりの語の使われ方に示されるとおり、神不在のまつりであり、「お祭り騒ぎ」的なものであると言える。

この祭りの語義を念頭に置いて、浜のくらしと祭りの衣裳について考察を進めていきたいと思う。

漁村での生業は、漁業・自給的農業であり、その日常生活、すなわち褻の生活の中には、大漁・船の安全・無病息災・天候等を祈る海の信仰が存在し、「祭り」の語の本来の意味に示されるとおり、その信仰が神をまつり、神に感謝・祈願する行為をなし、儀式化されて海の祭りになったと考えられる。そうしてこの祭りは、日常生活の区切りとなり、褻の生活に対し、晴の日としての一年の運行を導く役割を果たしている訳である。

3. 海村地域の7例の祭り衣裳

次に、7例の祭り衣裳について述べる。表3は、各祭りにおける着装者とその衣裳について、服種・文様・染色・色彩(P.C.C.S.表示)・素材・構成・装身具等をまとめたものである。7例の祭り衣裳を大まかにまとめると、神事を行う神職・巫女の伝統的衣裳と、祭りを実際に進行する地元青年団員の法被・浴衣等の衣裳の二つに大別することができる。そのそれぞれについて、具体的事例をあげながら述べることにする。



(1) 神職 (大提灯まつり)



(2) 神楽青年 (大提灯まつり)

図4 神職・神楽青年衣裳

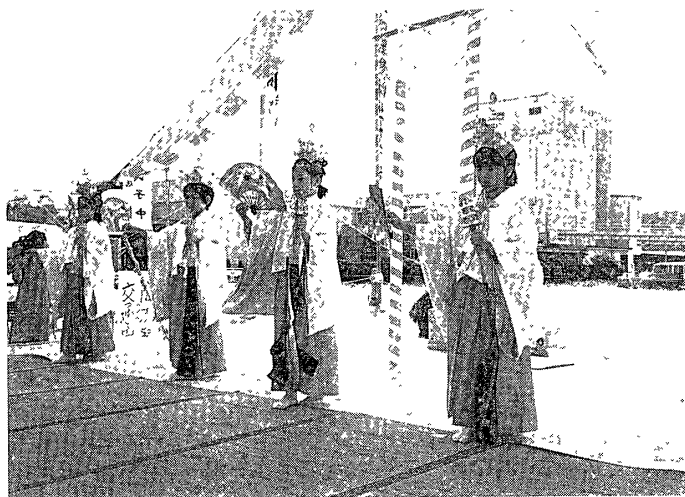
(1) 神職・神楽青年の衣裳

図4は、(1)神職と(2)神楽を奏する青年の衣裳である。服種は狩衣+長着+切袴に代表される。狩衣は、唐代に流行した胡服の系統である盤領まるえりの上衣で、古く平安朝の昔から公家の間で広く用いられた狩猟用の略装であるが、明治以降、神職の祭祀服として着用されている。文様は、鶴紋、八つ藤紋などがあげられる。色彩は、紫、紺、青、山吹色、白などで、素材は絹、木綿、

麻が使われている。構成については狩衣が衿、長着と切袴が単衣となっている。

(2) 巫女・太鼓打ち少年の衣裳

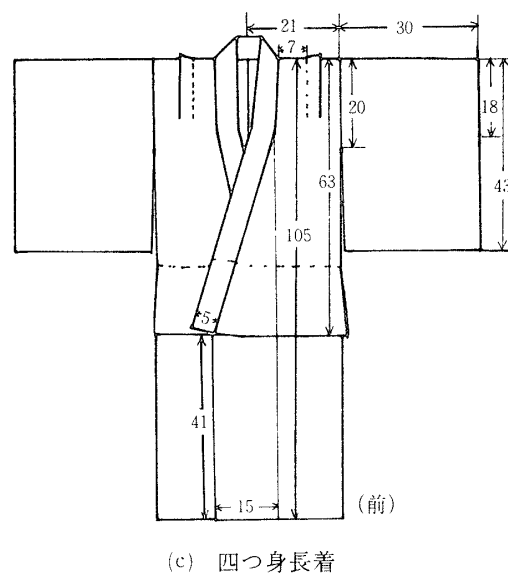
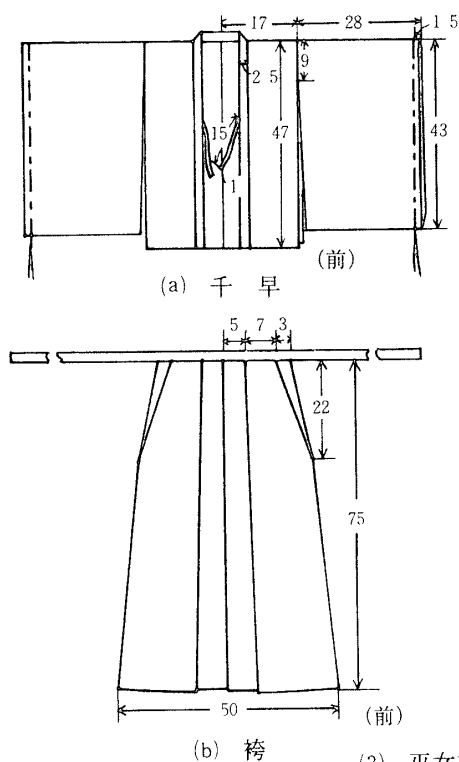
図5は、(1)巫女と、(2)鯛まつりにおける太鼓打ち少年の衣裳である。また(3)は、(1)の鯛まつりにおける巫女の衣裳の構成図である。まず巫女の衣裳について、服種は千早+白衣(四つ身長着)+袴にまとめられる。千早は、平安時代中期になって祭服や、巫女の着る衣裳として用いられるようになったものであり、原始的な衣服で、貫頭衣の形式を残したものである。文様



(1) 巫女 (鯛まつり)



(2) 太鼓打ち少年 (鯛まつり)



(3) 巫女衣裳の構成図 (鯛まつり)

図5 巫女・太鼓打ち少年衣裳

は、大提灯まつりの巫女の長着にみられる鶴、花紋の他は無地である。色彩は白・赤が中心で、その他、飾り帯や紐に青や黄の原色も使われている。この白という色は、神に舞を奉納する巫女の純粹さ、清浄さを表現するものであり、赤は魔除けを意味し、また舞を華やかにし、神の目を楽しませる色であるとも考えられる。素材は木綿の他、袴にはしわになりにくい化繊が使われている。構成はすべて単衣である。また、鯛まつりの太鼓打ちの少年の衣裳は、四つ身の振袖に帯やたすきを着装し、股引にわらじをはいているが、大変珍しい例としてあげられる。



(1) 大提灯まつり



(2) 鯛まつり

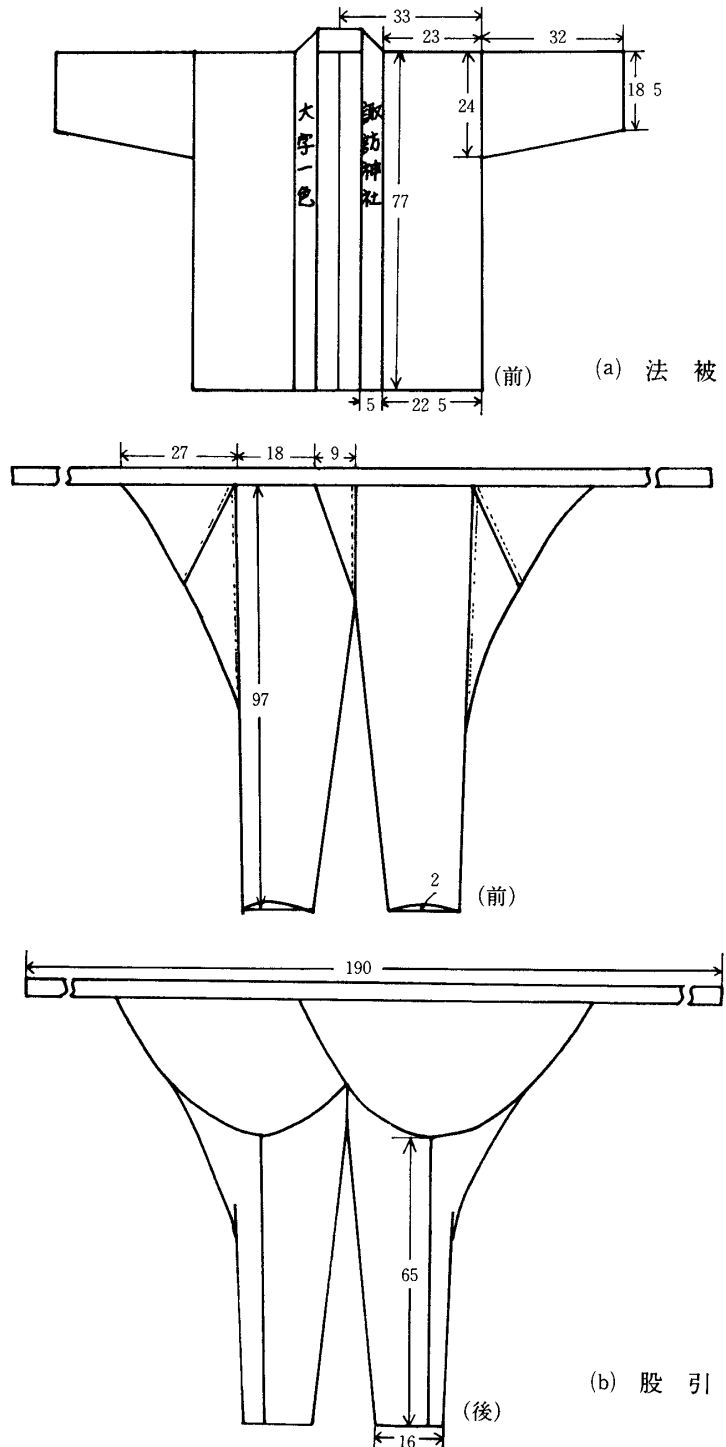


図6 地元青年団員の法被浴衣姿

(3) 地元青年団員の法被・股引構成図 (大提灯まつり)

(3) 地元青年団員の法被・浴衣・禪姿

図6(1),(2)は、地元青年団員の法被・浴衣姿である。また(3)は、大提灯まつりにおける法被と股引の構成図である。地元青年団員の祭り衣裳について、服種は法被(＋股引または半股引)、浴衣、禪の三つに分けられる。法被はもともと武家の下僕、職人などが着用した表着の一種である。法被の形態は、広袖で膝位までの短い上着であったが、後には一般の表着と同様に対丈になった。この法被が文化(1804年)以来、半纏に置き換えられてからは、丈も短い膝上丈となり、形態上からも染色上からも半纏と混同されるようになって現在に至っている。また浴衣とは、もともと「湯帷子^{ゆかんひし}」と言ひ、沐浴する時に用いられていたが、室町時代の終わり頃から、盆踊りの流行に伴って、民間で一般的に着用されるようになった。幕末頃には、浴衣は単衣や帷子に代わって貧しい庶民の普段着となったのである。文様については「祭」、「龍雷」、「雲」、「漁うしを」などの文字を背紋として使う例や、菱繋ぎ紋、市松紋、波に千鳥、網紋等を法被の裾文様として用いる例がみられ、文様は海や空といった自然の要素をモチーフにした吉祥文様が用いられている。色彩は、青・白・赤の三色が基本色となり、青または紺地に白、赤の背紋や裾文様が置かれ、海の青に火が燃え盛るような激しい祭りの動的なイメージを描いたものになっている。その衣裳からは、逞しい海の男たちの活気ある祭りの場面を感じとることがで



(1) 三河鳥羽の火まつり



(1) 鯛まつり



(2) 左義長まつり



(2) 龍宮まつり

図7 地元青年団員の白装束・禪姿

図8 現代における祭り衣裳

きる。素材はすべて吸湿性の優れた木綿が使われ、構成は単衣である。

その他、図7(1)にあげた三河鳥羽の火まつりの衣裳は、祭りの行われた神明社の古くなった幟を法被と股引に作ったものである。この幟は魔除けの力があると言われ、幟で作られた法被・股引を着装することによって、点火された「すずみ」の中になだれ込む若者たちの護符としての役割を果たしているのである。また、(2)左義長まつりでは、禪に腹帯が用いられ、裸体には人物の肖像や船などの絵柄が描かれている。この身体描^{いなせ}絵は、一種の入墨の意味をもつと考えられ、祭りに参加する青年団員たちの逞しさや鯨背さを表現するものであろう。

(4) 三河湾の7例の祭り衣裳

以上、三河湾の7例の祭り衣裳について、表4のようにまとめることができる。すなわち、7例の祭り衣裳は、1. 伝統的神事に携わる神職・巫女の衣裳と、2. 地元青年団員の祭り衣裳の二つに大別される。伝統的神事を司る神職の衣裳は狩衣、切袴、長着に代表され、巫女の衣裳は千早、長着(白衣)、袴にまとめられる。地元青年団員の祭り衣裳は、法被・浴衣・禪に集約され、その衣裳は、肌を被覆しない解放的なかつての浜での仕事着や日常着に、大漁祈願等の民間信仰に基づいた大胆な文様、色彩を施したものであると言うことができる。換言すれば、蓑の生活における機能重視の海での仕事着に、民間信仰に基づいた晴の要素を加えたものとして捉えることができる。

その他、図8(1)鯛まつりの例にみられるような、若者による多彩な原色を用いた現代風感覚の法被や、(2)龍宮まつりの例にみられるような手軽な海水パンツの着用もみられ、それらは伝統的な法被・股引・浴衣・禪などの衣裳とともに用いられている。

4. 総 括

以上よりまとめると、祭り衣裳より、すでに述べた仕事着という蓑の生活要因に、文様・色彩の工夫などの晴の要素を加えた、蓑と晴の要素の混在、また伝統的衣裳に現代的要素を加えた伝統的・現代的要素の混在といった状況がうかがわれる。

「祭り」の語は、その本来の意味から現在に至るまで、時代の推移にしたがってさまざまな意味を含み、変化を遂げてきたのである。その現

表4 三河湾の祭り7例の衣裳まとめ

- 1 神事に携わる神職・巫女の衣裳
 - (1) 神職の衣裳
 - ①服種：狩衣+長着+切袴
 - ②文様：鶴紋、八つ藤紋、等
 - ③色彩：紫、紺、青、山吹色、白、等の色彩
 - ④素材：絹、木綿、麻
 - ⑤構成：狩衣——裕 長着・切袴——単衣
 - (2) 巫女(糸姫)の衣裳
 - ①服種：千早+白衣(四つ身長着)+袴
 - ②文様：無地中心
 - ③色彩：白、赤、(青、黄)、等
 - ④素材：木綿、化繊
 - ⑤構成：単衣
- 2 地元青年団員の祭り衣裳
 - ①服種：
 - 法被(+股引または半股下)
 - 仕事着+晴の要素(文様、色彩)
 - 浴衣——日常着+晴の要素(文様、新調)
 - 禪(+腹帯)——仕事着
 - ②文様：「祭」、「龍雷」、「雲」、「漁うしを」、等文字背紋
菱繫ぎ紋、市松紋、波、鳥、網紋
 - ③色彩：青、白、赤
 - ④素材：木綿
 - ⑤構成：単衣



図9 現代の祭り風景(鯛まつり)

代における「祭り」の語義のとおり、本稿でとりあげた三河湾をめぐる7例の祭りは、神に供え、祈るという祭りの本義を核として存在させ、その周囲に、図9の例にみられるようなエレキコンサートやカラオケ大会などの新しいイベントを併せもつ、華やかな「見る祭り」へと変容している。その衣裳は、伝統的・現代的要素の混在という今日における祭りの現状を象徴、あるいは如実に表現しているものと言うことができる。

要 約

1. 三河湾をめぐる海村地域の祭り7例を季節で考えてみると、初夏の祭り、夏祭り、冬の祭りの三つに分けられる。その由来・歴史・内容についてはさまざまであるが、どの祭りも大漁、船の安全、無病息災等を祈願する意味を併せもっていると言うことができる。

2. 「祭り」の語義と浜の暮らしについて要約する。「祭り」とは本来、神仏・祖霊に奉仕して、感謝・祈願するための儀式であると言うことができる。海の信仰は大漁・船の安全等の祈りから発生したが、海の祭りはその祭りの語義のとおり、神をまつり、神に感謝・祈願する行為が儀式化されたものである。この祭りは日常生活の区切りとなり、褻の生活に対し、晴の日として一年の運行を導く役割を果たしていると言うことができる。

3. 7例の祭り衣裳を概括すると、神事を司る神職は狩衣・切袴、巫女は千早・袴等の衣裳である。祭りを進行する地元青年団員らは法被・浴衣・禪等の衣裳であるがこれらの祭り衣裳は、膚を被覆しない解放的なかつての浜での仕事着や日常着に、大漁祈願等の民間信仰に基づいた大胆な文様、色彩を施したものである。換言すれば、褻の生活における機能重視の海での仕事着に、民間信仰に基づいた晴の要素を加えたものとして捉えることができる。その他、若者による多彩な原色を用いた現代風感覚の法被等もみられ、祭り衣裳より、褻と晴、伝統的・現代的要素の混在といった状況がうかがわれる。現代において、これら7例の祭りは、神に供え、祈るという祭りの本義を今も内在した伝統的儀式を守りつつ、一方で新しいイベントを含んだ華やかな「見る祭り」へと変容している。その衣裳は今日における祭りの現状を如実に表現しているものと言うことができる。

文 献

- 1) 倉林正次：神の祭り・仏の祭り，佼成出版社（1981）
- 2) 倉林正次：日本祭祀研究集成，1，名著出版社（1978）
- 3) 倉林正次：日本まつりと年中行事事典，桜楓社（1983）
- 4) 愛知県小中学校校長編：郷土の祭，愛知県教育振興会（1971）
- 5) 名古屋地方観光宣伝協議会編：なごや地方のまつり，名古屋地方観光宣伝協議会（1971）
- 6) 後藤 淑：祭りと芸能の旅，3，ぎょうせい（1978）
- 7) 後藤 淑：日本の祭り，4，講談社（1983）
- 8) 新村 出：広辞苑，3，岩波書店（1983）
- 9) 三省堂編修所：広辞林，5，三省堂（1979）
- 10) 日本大事典刊行会編：日本国語大事典，9，小学館（1981）
- 11) 服装文化協会編：服装大百科事典，上・下，文化出版局（1981）
- 12) 財団法人日本色彩研究所編：色名事典，財団法人日本色彩研究所（1977）